

十勝のチカラ (地から) 2019.10.7 発行 No.2 (発行不定期)

発行人: 日本酪農青年研究連盟 十勝協議会 会長 高野 修一
事務局: 雪印メグミルク(株) 大樹工場内(酪農部 十勝担当)
連絡先: TEL:01558-6-2121 FAX:01558-6-2124



酪青研全国大会が開催されます！ —今年も千葉大会—

いよいよ第71回日本酪農研究会が千葉県成田市の成田市で開催されます。今回は大会の概要と酪農研究会(=通称全国大会)について歴史を振り返りつつ多くの会員の皆様にご参加頂きたいと思っております。費用の助成もありますので少しでもご興味があればぜひ事務局までご連絡下さい!!

History ~酪青研71年の歴史を紐解く~

●酪青研の誕生

酪青研は1948年(昭和23年)に北海道酪青研が産声を上げます。酪青研は黒澤西蔵翁が唱える「健土健民」という信念のもと、第二次世界大戦後にいち早く酪農再建運動を指揮し自発的に学習を続けていた北海道の酪農青年を支援する形で酪農青年研究会が立ち上がります。この組織はやがて日本酪農青年研究連盟へ発展していくのです。

●酪農研究会の開催

記念すべき第1回大会は「北海道酪農研究会」と称して北海道酪農協同株式会社大会議室(現在の雪印メグミルク株式会社北海道支店)で12月10~12日に開催されました。その後1950年(昭和25年)には黒澤西蔵翁を名誉会長に推薦し、現在の黒澤賞が設定されました。1959年(昭和34年)には研究会発表最優秀賞者に初の農林水産大臣賞を、1980年(昭和55年)の第33回大会より女性発表者へ太田賞を設け現在の大会の礎が築かれました。

Project ~事業内容と十勝協議会について~

●酪青年研の事業内容

酪青研の研究目標は単研(単位研究会)活動・研究活動を基本とし、時代と地域に融合した豊かな生活とゆとりある経営の確立です。日本連盟の主な事業は①日本酪農研究会の開催②全国レディースの集い③海外酪農研修④機関誌「酪農青年」の発行・インターネットページ編集がメインとなっています。

●十勝協議会の運営体制

現在、十勝には十勝協議会・北部十勝地方連(陸別町)・西部十勝地方連(清水・新得町)・南部十勝地方連(大樹・広尾町)が活動を行っております。現在の十勝協議会の代表会員は119名で北海道の協議会の中でも最も人数が多い協議会となっております(北海道全体で367名)。十勝協議会の主体事業には①管外視察研修(隔年)②技術検討会③スポーツ交流会等が開催されております。その他、各地方連においては婦人研修会や生産性共励会、若手視察研修会、収穫感謝祭など多種多様な事業が展開されています。

ここまでは酪青研のほんの一部をご紹介してきました。続きは全国大会をご覧頂ければより一層の魅力が伝わります。全国の盟友の発表を生で感じれば、きっと皆さんの熱い酪農魂がより燃え上りますよ!

Seminar ~第71回日本酪農研究会について~

●第71回日本酪農研究会(千葉県成田市) ※通常会員の方は19日の受付からとなります!

日程: 2019年11月18日(月)~21日(木) 会場: 千葉県 成田ビューホテル

18日(月) 15:30~監査委員会 17:00~常任委員・事務局長会議(※)

19日(火) 9:00~常任委員・事務局長会議 14:00~運営委員会 15:00~受付 16:00~総会

20日(水) 9:00~開会式 10:00~経営発表 13:30~意見発表 17:00~閉会式 *交流会

参加はまだ間に合います! 時間が許す限り事務局が皆さんを勧誘にお誘い致します(笑)!!

特集 酪青研キーマンを訪問

今回は日本連盟委員長(全国)に就任された山下 博委員長にお話をお伺い致します。

File.03 山下 博 委員長 「酪農のゼネラリストを目指したい」

(南部十勝地方連 大樹単研) 「酪農はスペシャリストだけでなくゼネラリストも必要。酪農経営はもっと広い知見と能力、そして技術の平準化が必要。」そう語るのは昨年日本連盟委員長に就任した山下博委員長。この言葉は雪印メグミルクの公式ホームページに連載される牧場通信撮影時に出た言葉。山下委員長は2004年(H16年)第57回日本酪農研究会で黒澤賞を受賞している。現在は株J-Proコントラクトファームの代表取締役を務める。J-Proの主な事業は①搾乳部門②コントラ部門③哺育部門の3部門体制で事業を運営している。



この体制になる転機は15年前の黒澤賞受賞が大きな影響を与えたと語る。当時、酪農のスペシャリストを目指していた山下委員長だったが、日々乳量を追い求め家族団欒の時間が削られていった。全て自分達の手で完結できる自己完結型の経営であった為だ。そんな中経営発表を行った。自分の経営を見直すだけでなく、自分の将来を真剣に見つめ直す機会になり、乳量だけではなく山下牧場が地域にもっと必要とされる存在になりたいと考えようになった。



そして長年負担をかけてきた妻(展子さん)にも仕事だけでなくもっと自分の好きなことをやって欲しいと強く思うようになった。そこで当時大樹町内には存在していなかった哺育センターを1番に立ち上げ牧場を法人化し大きく舵を切った。これにより新たに従業員の雇用を始めた。酪農の技術は長年の経験や勤によるもので形成されていることが多い。そこを徹底的に平準化(=誰もが同じ作業を出来る)することにした。

つまり、酪農に特化したスペシャリストを1人作るのではなく、作業の平準化により必要な作業が従業員皆で出来るようになったのだ。酪農のゼネラリストを目指すことで幅広い視野で従業員皆が作業出来る牧場となった。そう語る山下委員長の傍らには今日も従業員の笑顔が広がる。

「酪青研の強みは全国に広がるネットワーク」

昨年の日本連盟定期総会から日本連盟委員長に就任した山下委員長。委員長になって約1年が経つ今、現在の心境を語っていただいた。「昨年末にはTPP11の発行、改正畜安法により新たな生乳取引が一步踏み出され酪農乳業は大きな転換期。足腰の強い経営には自らの経営を多角的に見渡せる広い視野が必要。酪青研は全国にネットワークを持つ組織であり、この最大の資源こそが時代を生き抜く力になる」と力を込めて語る。また、酪青研は地域に密着したネットワークがあり、仲間づくりには最適な組織だと語る。「酪青研は地域の単研活動が活動の軸となる。そして全国の盟友と知り合い大いに話し、広い視点で自らの酪農経営を充実させてもらいたい。」と熱心に話すその姿は深く胸に突き刺さる。



酪農語録 「牛群雲の如し」 言葉: 第21代北海道長官 佐上信一